ゾウの飼育管理要領

1992.8.1

大阪市天王寺動植物公園事務所飼育課

I、目的

ゾウは飼育動物のなかでも最も大きく、力も強く非常に危険な動物であり、 当園でも過去に何度かゾウによる人身事故が発生している。これら事故を未 然に防止するためにはゾウにいっさい手を触れず遠隔操作による間接飼育の 方法をとるか、もしくは馴致、調教を完成した直接飼育による方法を取るの かの2つと思われる。

本要領はゾウによる人身事故を未然に防止するためと新たにゾウの飼育係を養成するために当園で飼育のゾウを対象に定めるものである。

Ⅱ、アジアゾウの生態

学名: Elephas maximus 英名 Asiatic elephant

亜種: インド、セイロン、スマトラ、マレー

生態: 母系集団、8~20頭のメスと子からなる群れ、オスは単独もしくは オスグループを形成。 歩行は側対歩、足への負重は4 t のゾウで 足裏1 cmに600 g

生理: 睡眠は2~4時間/日、呼吸は4~6回/分、興奮すると15回以上。 脈拍は25~35回前後/分、体温は36~37℃、排尿は10~14回/日、 排便は12~20回/日、4~6個/回、飲水量は70~100 ℓ/日

繁殖: 性成熟は2で9~12年、♂で15年、 妊娠期間は20~22カ月

生理: 発情周期は22日、 発情日数は2~8日

マスト: オスの側頭腺からの分泌液の漏出で数時間~数カ月の持続。 極端に攻撃的となり制御困難となる。メスでも側頭腺からの分泌が見られる。

行動: 利口で敏感、物静かに足早に歩くことが可能。急旋回も可能。潜水、 水泳も巧み。

Ⅲ、当園の飼育個体

愛称	入園年月日	産地	順位	性格	特徴
春子	1950. 4, 15	タイ	1	温和 頑固	折損した上顎の門歯、額から鼻
		-) ()	への皮膚が白っ
	ė				ほい
ユリ子	1950. 6. 05	タイ	3	臆病 攻擊的	門歯が露出せず
				-	尾は下部で弯曲
					行動が読める
ラニー博子	1970, 5, 03	インド:	2	臆病、攻擊的	他の個体よりや
* (E				甘えん坊	や体格が小さい
	-		<u>.</u>	不気味	頭の横振り
2					行動が読めない
		V	E *		

IV、飼育管理

1、日常の飼育管理の手順

全体的なものとしては

- (1) 午前9時過ぎにまずゾウ舎の寝室の扉を開けた際、その日の各ゾウの目の様子、態度等を充分観察する。
- (2) 係留チェーンを外し油圧扉を開放してゾウを放飼場に出すためにおやってをとして、放飼場にリンゴ、或は青草等を撒く。
- (3) 寝室内を清掃した後、他の持ち場の動物放飼と清掃にかかる。

- (4) 飼料調理場で担当動物の飼料を調理し、動物舎に運搬する。
- (5) 午後に小量の餌(青草、リンゴ、雑木)をゾウに与え、注意をそらしている間に放飼場の清掃を行う。
- (6) 午後4時に油圧扉の解放、ゾウの収容、足に係留チェーンの装着、給餌を行う
- (7) 放眴場の清掃を行う。

個体別としては

(1) ラニー博子の場合、

ア、係留チェーンを外す前にリンゴを与えながら慢性化した側頭腺の床 づれの洗浄消毒と外傷の消毒を行う。この後、裏に回って安全棚の間 より後肢の足あげをさせ係留チェーンを外す。

- イ、放飼場に出す場合、個体間の力関係があるので、スムーズに出すた めにリンゴを分散してばらまく。
- ウ、4時に収容する場合、大声でゾウの名前を呼び入室を促す。概ねラニー博子が先頭で入ってくるが、ゾウの間でトラブルがあったり、寝室内にネコやネズミを発見すると甘え声で泣いたり、喉ならしをして入室を渋り、前後逆に尻から入室することがある。また、他のゾウに入室を阻害される場合はユリ子、春子を一時的に春子の寝室に収容し、入室を確保してやる。それでも入室を拒む場合は複数のキーパーが出てロープで後肢を結紮し、手鉤、フォークで威嚇しながら誘導する。
- エ、入室するとリンゴを数個与えながら側頭腺の洗浄消毒と外傷があれ ば消毒する。
- オ、バックの声をかけ、裏に回って安全栅の間より後肢の足上げをさせ、 係留チェーンを装着する。チェーンの装着は毎日左右を交互に変える。 装着後、左右の足あげの馴致を $3\sim4$ 回行う。馴致後エサを持って入 るが、一時お預けをしたうえで給餌する。

(2) 春子の場合

- ア、係留チェーンを外す前に普段と様子が変わっているようであれば、 リンゴを数個与えながら注意してチェーンを外す。
- イ、放飼場に出す場合はラニー博子の場合と同様である。
- ウ、春子はゾウ3頭の中でも最も順位が高いので、他の2頭の調整役を 果たす。ユリ子とは同じ年に子ゾウでやってきたこともあって仲は良 い。
- エ、4時に収容する場合、興奮したり、様子がおかしいと順位が乱れ、 すぐに自室に入らずうろうろする。この際は強い掛け声で自室への入 室を促す。
- オ、入室後の油圧扉の閉鎖確認については、春子、ユリ子に小量のリン ゴを与え、注意をそらしている間に完全閉鎖を確認する。
- カ、入室後はそのままにして、ラニー博子の係留、給餌作業が済むまで 一旦、春子の寝室の扉を閉める。
- キ、ラニー博子の係留、給餌作業が済んでから再び春子の扉を開け、声を掛けながら根菜の入ったコンテナーを引いてきて鼻先に置き、エサを好きに取らせている間に前肢に係留チェーンを装着し、終了した合図として足を軽く叩く。チェーンの装着は毎日左右を交互に変える。その後エサを順次与える。

(3) ユリ子の場合

ア、ユリ子の場合は係留をしていないので放飼場に出す時も、寝室に収容する時も動きには十分注意する。解放、収容はラニー博子や春子と 一緒に行うが、順位付けが出来ているので、ほぼ規則正しく行える。

イ、ユリ子は凶暴になったという理由で昭和55年から係留していない ので、気を許して近づかない。放飼場の清掃、給餌についても複数で 従事し、必ず1名は監視をする。

ウ、ユリ子の給餌は春子がチェーンを装着され餌を食べている間に、も

う1名のキーパーが春子の前を注意深く通り、ユリ子と春子の間仕切 棚越しに給餌する。

2、飼育と馴致の方法

(1) 観察

ア、寝室への収容、放飼場への解放、給餌等の際には十分観察するのは もちろんであるが、これ以外の時にも時間を割いて観察に努める。

イ、観察は次の部位について十分留意する。

皮膚・・・・・外傷はないか、化膿はないか、湿疹やかぶれはないか、皮膚に艶はあるか、ダニやシラミ等外部寄生虫はいないか、清潔か側頭腺・・・分泌はないか、分泌のあるときの気分、行動はどうか 天然孔・・・鼻からの出血、膿汁はないか、鼻汁の状態はどうか、耳からの出血、膿汁はないか

> 肛門からの出血、膿汁はないか、粘膜の脱出はないか、下痢 はしていないか

外陰部からの出血、膿汁はないか、発赤、腫脹はないか、腟、 子宮粘膜の脱出はないか

口腔からの出血、膿汁はないか、臭い匂いはしていないか、 歯は折れていないか、歯茎が腫脹していないか

眼球……目の充血、出血はないか、目やにはないか、鋭い目付きか、 赤く燃えるような目か、カッと目を見開いているか、とろんと した目付きか

蹄……蹄が伸び過ぎていないか、割れていないか、出血はないか 行動……元気はあるか、鈍重か、鼻先を地面につけじっとしているか、 しんどそうに体を壁等に傾けているか、高い声(トランペット 音)で鳴いているか、走り回っているか、耳を開きパタパタし ているか、首振りを常時しているか、鼻を激しくぶるんぶるん と振っているか、額や鼻を膨らませ鼻をブフツ、ブフツと鳴ら しているか、不安がって背を曲げ鼻で陰部を触っているか、 不安げに尿を小量づつ垂れ流しているか、甘えて喉鳴らしをしているか、忍び寄ってくるか、鼻を巻き頭を下げ攻撃的な姿勢 をとるか、鼻を振り上げ叩く姿勢をとるか、力強く地団太を踏 んでいるか、足蹴りをしているか、足を前後に擦っているか

歩行……いつもより速いか、或いは遅いか、跛行を起こしていないか ウ、観察した事項については飼育日誌(動静日誌)に毎日記録するよう に努める。

(2) 掛け声

ア、ゾウは賢く、キーパーを良く認知するので、掛け声は共通のものと して統一したものを用いる。声の抑揚、強さ等も出来るだけ揃える。

オーイ、マエ、バック、マワレ、アシ (挙上)、ヨーシ (ハイヨーシ) ダセ、ラスト、トマレ、マテ、

イ、ソウがいたずらをしたり、危険な動作をした時は大きな声で激しく 叱責する。

ウ、愛称の呼掛け方

春子 (ハルコ、ハル) ユリ子 (ユリコ、ユリ) ラニー博子 (ヒロコ、ヒロ)

(3) 接触

ア、作業に掛かる際には、必ず安全靴を着用し足元の安全を確保する。 また、接触時に引張り込まれないようたえず着衣を整え、手には軍手 を着用する。

イ、ゾウを馴致の目的で接触する場合はゾウの動作に十分注意して、2 名以上の複数で行う。この際1名は必ず監視役を努める。

ウ、ゾウの背中のゴミを竹ぼうきで払ったり、夏場にホースで水をかける場合や、おやつとしてリンゴ等を与える場合にはゾウに声をかけてから行う。

- エ、馴致の目的でリンゴ等の餌を与える場合にゾウが開口して待ち受けている場合があるが誤ってくわえ込まれたり、反対にくわえたまま押されたりして事故を起こすことがあるので十分注意する。
- オ、ゾウに声をかけ軽く叩いてコミュニケーションを取ったり、リンゴ 等を与える場合には3頭のゾウに不公平のないように注意する。

(4) 治療の介助

- ア、外傷治療の場合は1名のキーパーが餌を与えることによってゾウの 気持ちを引き付けておき、その間に獣医師もしくはキーパーが薬剤を 塗布、噴射、注入する。
- イ、歯牙疾患の場合には1名もしくは複数のキーパーが餌をゾウの口の 前で高く掲げることによってゾウの口を最大限に開口させ、その間に 獣医師もしくはキーパーが観察し、薬剤を塗布、噴射、注入する。
- ウ、ラニー博子の体や足に疾患や外傷が認められる場合には、キーパー がいつもどおりの馴致で手鈎で足をあげさせ、運動を封じたうえで獣 医師やキーパーが触診、治療を行う。
- エ、ゾウへの経口投薬はゾウが非常に味覚に鋭敏で、賢いため、投薬方法にはあらゆる試行錯誤を重ねるとともに、根気良くゾウの不信感を取り除くよう努力する。実際の投薬には嗜好性の高い好物に薬剤を混入する他、砂糖水、豆乳等に薬剤を混入して与える。

(5) チェーンの装着

- ア、係留チェーンを装着するのは春子とラニー博子で、ユリ子は装着しない。
- イ、春子の係留は前肢に行い、毎日交互に変える。係留チェーンの脱着 はブルンメルフックを用いる。
- ウ、ラニー博子の係留は後肢に行い、毎日交互に変える。この際、足あ げ、後退、旋回等のトレーニング(馴致、調教)を行う。係留チェー ンの脱着はカラビナを用いる。

- エ、係留脱着作業時はゾウの表情、態度、目付き等を良く観察し、声を かけながら体を軽く触れて、安心させて作業をする。特にチェーン装 着時には前もって餌を与えながら行う。
- オ、係留チェーンの脱着時にはチェーンの損傷、摩耗がないか十分注意 する。

(6) 馴致と調教

ア、3頭共通のもの

当園では3頭共通のものとして馴致調教は行っていないが、通常、 次のことを行っている。

ゾウを寄せる場合には「オーイ」と大きな声をかける。

口を開けさせる場合にはリンゴ等を口元に持ってきて高く掲げて与えるふりをして口を開かせる。

給餌、ブラッシング、水洗等の際には声をかけることはもちろんであるが、出来ればその際に鼻、足、体等を軽く触ってやる。

イ、ゾウの馴致、調教の開始はゾウの年齢が若ければ若いほど良いが、 現在のところ若令個体がいないので、とりたてて初歩からの馴致調教 のマニュアルは定めていない。なお、当園の例では生後15年より本 格的に行い、一定の完成を見た例がある。

ウ、生後15年より馴致、調教を本格的に行った当園の1例

馴致、調教した個体名: ラニー博子

馴致、調教の方法:

(7) いままで前肢の係留は可能であったが、行動を抑制し、より馴 致を進めるために後肢の係留を開始した。そのために荒縄係留か らはじめ(その日のうちに鼻で引きちぎってしまうが、何日も反 復し)次にビニールホースで被覆した細鎖の係留へと順次それを 太くしていった。

- (4) 命令を絶対服従させるためと、体力を減じ動作を緩慢にするために飼料給餌量を日常の4分の1とした。(しかし、極度に餌を減じることはゾウの健康管理上、余り好ましいこととは思われず、通常の体に戻すのに相当の年月を要するので、実施の際は十分な注意が必要である。)
- (ウ) 荒縄係留、細鎖係留の状態で手鈎使用による前進、後退、止まれの馴致、調教を行い、これを完成させるため臀部、額を手鉤で強打する等して厳しく馴致、調教を行った。
- (I) 後肢に太い鎖の係留をした状態でバック、マエ、アシ、ダセ、マワレ、トマレの号令を憶え込ませた。
- (t) 1つ1つの動作が出来ればその都度、褒美としてリンゴを与えて馴致、調教を進めていった。

3、飼料の種類と量

1頭1日量

kg							
kg							
宜							
イタリアンライグラスの何れか) 13 kg							
宜							

4、給餌

- (1) おやつ程度のものを含め、朝、昼、夕の3回給餌するが、ゾウは絶 えず採食行動をとる動物であるので1日量を分散し、また、機会があれ ば剪定枝、レッサーパンダの食べ残しの竹葉などを与える。雑木の給餌 は嗜好品の役割の他、整腸効果があるので治療としても用いる。
- (2) 朝の給餌はゾウをスムーズに放飼場に出すために行い、昼の給餌は 放飼場のふんを取り除くために行うが、各々に力関係の順位があるの で食い負けや闘争のないよう分散してゾウに与える。夕の給餌はメイ ンとなるもので各々寝室に収容後、1日量の9割方を与える。
- (3) 寝室収容後の給餌には順序があり、ラニー博子、春子、ユリ子の順で行う。
- (4) 給水は朝、寝室よりの解放時に各々のゾウがプールの水を飲むことで十分であるが、将来的には寝室内に水飲み漕、給水設備も必要である。

5、排泄

- (1) ふんの質、量……日常のふんの質、量については注意深く観察する。 体調の悪い時、食欲の低下している時、闘争時、興奮時などにはふん の質、量、臭いに変化が生じ、特に臭いの強いもの、極端に量の少な いもの、砂の混じったもの、ガスの発生を伴うもの、水分が多く形が 崩れたものが見受けられる。また、排糞姿勢についても注意深く観察 する。排糞のしぶり、呻吟、疼痛、肛門の糜爛、発赤、出血、脱肛等 に注意する。
- (2) 尿の質、量……日常の尿の質、量については注意深く観察する。 体調の悪い時などには回数、量、臭いに変化を生じるので、強い着色、 白濁等に注意する。また、排尿姿勢や陰部の発赤、腫脹等も注意する。

6、清掃

- (1) 寝室内の清掃についてはゾウを屋外放飼場に完全に出してから行う。 工事、天候等で止むを得ず放飼場に出せない場合は危険のないように ゾウを順次隣室に移動させながら行う。
- (2) 寝室の清掃の際には係留チェーンの損傷、摩耗がないか点検する。
- (4) ゾウが展示されている放飼場の清掃を行う場合にはゾウの注意をそらし、1カ所に引き付けておくためにゾウに青草、雑木、リンゴ、ペレット等を与え、採食している間に手早く清掃を行う。
- (5) ゾウプールのふんを拾い上げるために長い竹竿付きの玉網を持ち出す場合にはゾウの寝室を通らず、必ず外の園路側から手渡す。
- (6) 経験の浅いキーパーがカート車、掃除用具を持ち出し放飼場を清掃する場合には、ゾウの寝室を通らず、必ずキーパー専用通路を通る。
- (7) ゾウの拾い食いによるモートへの落下を未然に防止するためにも努めてモート内の落葉、客の投げ餌は清掃しておく。

V、ゾウ担当キーパー養成期間

新任ゾウ担当キーパーの事故はゾウと接して6カ月~2年以内に起こることが多い、これはゾウが担当キーパーの順位を認知し、経験の浅いキーパーの能力を試したり、威嚇や遊びの誘い込みに対するキーパーの反応を楽しむ習性や行動があり、事故もこれらの習性や行動から引き起こされるものとかねてから言われてきたことである。このようなことから新任キーパーに対する事故を未然に防ぐためにも一定の予備研修期間を置いてゾウを知り、ゾウに慣れることはもちろん、ゾウが新任キーパーを選び、認知し、受け入れることが必要である。ゾウのキーパーとして完成されるのには通常6年と言われているが、キーパー自身の性格、気質、取り組み方によって完成度が違い、

何年と年限は限定できないが、ゾウのキーパーとして認められるか否かはゾ ウが決めるといってもよい。

1、予備研修期間:1カ年

本来はゾウに一切触れずに予備研修期間を終了するのが望ましいが、現 状のチーム構成から考えて、ゾウに一切触れずに作業をすることは不可能 である。従って、主担キーパーの指示に従い注意深くゾウに接する。

- (1) 新任キーパーは担当動物の作業を行うかたわら、ゾウの観察時間を豊富に取り、ゾウそのものを知るよう努力すると共に、ゾウにキーパーを覚えさせる。しかしながら、この期間はゾウの挑発にも乗らず、また、みだりにゾウに親しく近づくことも警戒しなければならない。
- (2) 予備研修期間1カ年におけるゾウ舎での作業は、朝、ラニー博子にリンゴを与え、主担キーパーの側頭腺への消毒作業を補佐する。その後ラニー博子のチェーン解放時に主担キーパーがチェーンを外し易いように手鈎による足あげを行う。春子のチェーン解放の際には主担キーパーのチェーンを外す作業を監視する。油圧扉操作室のノブを操作し各扉を開放して全てのゾウが放飼場に出たことを確認した後、油圧扉を閉鎖する。午後の放飼場清掃は新任のキーパーが寝室側でエサを与えゾウの気を引き、この間に主担キーパーが行う清掃作業を監視する。夕刻の寝室収容の際は、ラニー博子にリンゴを与え、主担キーパーの側頭腺への消毒作業を補佐する。ラニー博子のチェーン係留作業では手鈎による足あげを行い、主担キーパーのチェーン係留を補佐する。この際リンゴの給餌は主担キーパーに任せる。以上の作業は安全棚の外側から行う。ゾウ収容後の放飼場清掃はキーパー通路を通って行い、決して寝室内を通らない。
- (3) ゾウの主担キーパーから各個体の行動の癖、気質、取扱法等について 指導を受ける。また、統一された掛け声も習得する。

- 2、見習い期間:3年~4年
 - (1) 2年目に入る新任ゾウ担当キーパーのゾウ舎における作業は予備研修 期間の作業とほぼ同一であるが、各ゾウ1頭毎に1年の見習い期間を置き、最後に全てのゾウの研修を1年置き、完成させる。
 - (2) 特に馴致の出来ているラニー博子に対しては後肢へのチェーン係留、 解放は主担キーパーに代わって行うことが可能である。また、棚越しの直 接給餌も可能である。
 - (3) ゾゥへの至近距離における給餌は無理であるが干草の投げ込みは可能である。
 - (4) ゾゥへの直接給餌、至近距離での治療介助、寝室内の通過、ゾゥ同居 時の放飼場清掃は行わない。

3、完成期

- (1) ゾウの個体それぞれによって新任キーパーへの接し方が異なり年限は切れないが、ほぼ丸5年を目安とする。
- (2) この頃からゾウの状態を観察しながら寝室内も通行し、徐々に春子の係留、直接給餌も行う。また放飼場内の清掃にも参加する。
- (3) ほぼ5年で完成といえど、ゾウはキーパーの順位を認知しており、それなりの接し方をするので、一応の完成をみたからといって決して油断をしてはならない。
- (4) 5年で一応の完成を見たものの今後、新人養成の立場となると少なくとも精通、円熟するには10年近くは要すると考えられる。また、ゾウの寿命は長く、反対に飼育係の持場担当は短い場合が多いので、ゾウとのコミュニケイションを図るうえからも長期の飼育担当が必要である。

VI、事故防止

1、危険の察知と事故防止

- (1) 日常、園内を通行するモートラ、軽4トラック等は見慣れているが、 大型スイーパー、ダンプカー、タンクローリー、レッカー車、パワーショベル等は見慣れていないため、トランペット音を発したり、神経性下痢や排尿をして不安がる。またヘリコプターの低空飛行も同様の動作がみられる。このような場合、ゾウの行動、態度、目付き等に注意を払わねばならない。なお、事前にこれらの進入、通行が判る場合には時間帯等調整が必要である。
- (2) ソウの牙の折損からくる歯肉炎、歯髄炎及び、化膿性の炎症等の傷みで気が荒くなり、落ち着きもなくなることがあるので、日常の食嗜、食欲の変化及び口腔の観察にも注意を払わねばならない。
- (3) 原因は不明だが気が荒かったり、他の同居ゾウとの小競り合いで興奮していることもあるので動作等よく注意する。
- (4) 寝室、放飼場内でネコ、ネズミ等の日常見慣れない小動物と遭遇した場合に、非常に興奮することがあるので、これらの侵入を事前に排除にし、注意を払わねばならない。
- (5) ゾウがキーパーに付きまとったり、忍び寄ったり、鼻で匂い嗅ぎをしたり、鼻汁をかけたりしていつもより異常に関心をよせる時は十分注意をしなければならない。
- (6) 落着きがなくうろうろと歩き回り、耳を大きく前に広げて目をカッと 見開いている時、或いは額や鼻を大きく膨らませ、ブフツ、ブフツと鼻 を吹いている時は何かに興奮しており、異常を感じて注意を払わねばな らない。
- (7) 目を大きく見開いて、額を鉄栅に打ちつけたり、鉄栅を嚙む動作の見られる時は興奮しているので注意しなければならない。
- (8) 朝夕のゾウの解放、収容では行動するゾウの順序は決まっているが、 時として順序が狂いゾウがうろうろすることがあるが、日常の動作とは 違うので十分注意しなければならない。

- (9) 号令に対し拒否や無視をしたり、反応が鈍い時はキーパーの存在を無視しているので注意しなければならない。
- (11) 危険を感じた時はとりあえず大きな声で威嚇し、制止する。なお、退 避する際は背中を見せない。
- (12) ゾウとの対応は細心な心遣いで、判断と振る舞いは自信に満ちて大胆に、それでいて落ち着いた行動をとる。
- (13) ゾウからの攻撃やいたずらを回避するために、日常からゾウ舎の平面 図を熟知し、何処に退避塀や安全栅があるか体で憶えておくこと。
- (14) ソウの攻撃やいたずらを回避、制止するために必ず手鈎を常時着用し、必要な場合はこれを行使する。
- (15) 目的のない制裁や不必要、過度な制裁はゾウに怨みを買い、長く記憶し、つけ狙うことがあるので注意しなければならない。
- (16) ゾウの前では親しみを表す意味で体をかがめて座り込んだりしない。 ゾウに隙を与え、とっさの時の退避の遅れとなり、事故を誘発する。
- (17) ゾウの後ろを回る時は、後ろ蹴りや振り向きざまのアタックがあるので声を掛けるなどして相手に知らせ、黙って不意に後ろへ回ったりしない。
- (18) 不必要に、無造作に、目的もなくゾウの前に立たない。必ず声をかける。

2. 事故のパターン

- (1) ゾウの経験の浅いキーパーや新人を狙う。
- (2) 鼻先で匂い嗅ぎをする、鼻先でつつくなど挑発をする。
- (3) 一人で作業をしているときを狙う。

- (4) 鼻の下や顎の下をくぐった。
- (5) キーパーがいつもと違う動作と手順でゾウに接した。
- (6) 不安な態度でゾウに接した。
- (7) 過去にゾウに手痛い制裁を加えたことを憶えられていた。
- (8) ゾウを軽く見ていた。
- (9) 経験年数より自信が先行していた。
- (10) キーパーの体調及び気分が優れていなかった。
- (11) ゾウに声を掛けるなど、前もって自分の存在を知らさなかった。

3、事故事例

事例1: 昭和57年('82)4月12日午前9時10分頃

新採ゾウ担当4カ月のM君がラニー博子のチェーンを解放後、ゾウを寝室から出す手動扉の2カ所のボルトを自在スパナーで外していた。1個目のボルトを外したところラニー博子が寄ってきたので叱責した。2個目のボルトを緩めていたとき、再度寄ってきたが、この時は鼻を振り上げ叩き下ろすような攻撃姿勢だったので、とっさに持っていた自在スパナーで防ごうとしたところスパナーもろともゾウの口の中に入り手を嚙まれた。この際、急激なしびれを感じた。

なお、このよな事態になったのはM君の前にユリ子が扉越しにおり、 後ろにはラニー博子、横はコンクリート壁で逃げ場がなかった。

また、この日は中堅のS君が休暇で、H主任が油圧扉の操作をしており、M君が1人でチェーンの解放を行っていた。M君が1人でゾウを扱うようになったのは本採用後まもなくのことである。

事例2: 昭和58年('83)2月8日夕刻

夕方、H主任とゾウ担当1年2カ月後のM君が放飼場の清掃中、M君がカート車を放飼場から寝室の面格子に入れようとしたところ、右横か

らユリ子の鼻で右腕を強打され、カート車もろとも転倒し尻餅をついた。この際、横にいたH主任がユリ子の前に立ちはだかって制止し、威嚇した。この間にM君は寝室内に避難し、何か制裁する物を持参するようにとの指示でフォークを持参し、ユリ子を叱責しながら臀部を突いた。この後、約10分にわたり臀部が出血するほど制裁を加えた。

事例3: 昭和58年(*83)4月19日午前9時10分頃

ゾウ担当1年4カ月のM君が春子の右前肢のチェーンを解放し、春子の鼻の下をくぐったところ胴を鼻でまかれた。M君は胴を巻かれたまま数歩放飼場の方に後退した。外でこの事態を見た先輩のS君が驚いて大声で威嚇しながら寝室に入って来たので春子はM君の胴から鼻を外した。この際にM君は右足の甲を踏まれたが、すぐに足を抜き隣のユリ子の寝室を通って放飼場に避難した。すると今度は叱責している先輩のS君に春子が攻撃を仕掛け、鼻でS君の胴を巻いたがS君が拳で目を強打したところ鼻を外したので急いで避難した。

事例4: 昭和58年(*83)7月13日午前9時5分頃

新採ゾウ担当1ヶ月(通算経歴1年余)のK君がH主任立会いでラニー博子の右前肢にかけてある係留チェーンを解放しようとうずくまって作業をしていると、ラニー博子はK君の右肩口をつついたり、臭いを嗅いだりと挑発をくりかえした。K君がチェーンのシャックルを外している途中、余り執ようなので手で鼻を振り払った。この時にチェーンが外れラニー博子が自由になったとたん鼻を曲げ前頭部を下げ押し込んで来たためK君は尻餅をつき、斜め半身の状態で隣室との油圧扉まで押し込まれた。この事態にH主任が大声で威嚇し、助けを求めながらK君とラニー博子の間に分け入りK君を救出し、退避塀に避難させたが本人も避難する際、ラニー博子に右足足根甲部を踏まれ、胸部を何処かで打撲し

た。H主任は安全棚に避難しうずくまっていたが、この間にラニー博子は清掃用具を破壊するなど狂躁状態を示した。この後、H主任の救助要請に避難していたK君及び他の係員が駆けつけたが、ラニー博子は鼻汁をかけるなど威嚇を繰り返した。

事例5: 昭和63年('88)9月10日午前9時30分頃

ゾウ担当のH主任が3頭のゾウを放飼場に出し、日常の馴致として寝室内からゾウにリンゴを与えていたが、特にユリ子の口を開口させ右手で口の中にリンゴを入れていた際、リンゴを持った右手を舌と上顎でくわえ込まれた。引っ張り込まれては危険と察し、手を引き抜こうとした際、ユリ子がリンゴを取られると思ったのか、反対に体を寄せてきたため寝室の鉄栅に右腕が押し付けられる形になり右撓骨を骨折した。

Ⅷ、当園のゾウの由来

N	0	愛	8		称	性	産地	ļ.	来園年月	日	死亡生	月日
					,					F (4)	10001-1	0.11.0
1	1	団			平	σħ	マレーシ	ア	1914年12月		1926年1	.0月12日
2	2	常			磐	유	マレーシ	ア	1926年11月	l1日	1942年	1月20日
	3	ラ	ン:	プ	ー ル	우	g	1	1935年 6月	4日	1942年	3月 2日
4	4	٢			人	우	タイ阪神小	ーク	1943年 4月	26日	1943年	6月24日
1	5	春			子	우.	夕	1	1950年 4月	14日	生存中	
-	6	ュ		IJ	子	우	B	1	1950年 6月	5日	生存中	
	7	ラ	=		博子	우	イン	۴	1970年 5月	3日	生存中	



